

船井情報科学振興財団

報告書

織井理咲

University of Washington

Paul G. Allen School of Computer Science & Engineering

2023 年 7 月

University of Washington Paul G. Allen School of Computer Science & Engineering の博士課程の二年目が終了しました。今回は今年の振り返りと今年の夏の研究について書きます。

I. Qualifying Exam

5月に Qualifying Exam (Qual) を受け、無事合格することができました。Qual は研究のレポート + 30 分間の研究に関するプレゼン + 15 分間の質疑応答という形式でした。これでマイルストーンを一つ達成することができたので少しホッとしています。

II. 論文の執筆

二年目の前半は授業と去年の夏の研究で収集したデータの分析に取り組んでいました。2023 年の 1 月に夏の研究（マラウイ共和国の HIV クリニックでのフィールドワーク）に関する論文を執筆し、国際学会に提出しましたが、三ヶ月後に major revision の結果の通知をもらいました。論文の修正版を提出するまでもう三ヶ月待たなければいけなく、編集を始めた頃は「早く次の論文とプロジェクトに進みたい！」と強く思っていました。編集を重ねていくうちに論文の仕上がりが良くなるとともに研究分野に必要な知識を積むことができたと感じます。修正版を 7 月に提出しました。

論文の編集を進めながら去年の夏のフィールドワークで得た別のデータの分析を行い、論文執筆を始めました。他分野の研究者と共同研究を進めていくうちにコンピューターサイエンス以外の分野（具体的には Global Health）の観点や他分野の論文の書き方を学ぶことができました。特に私の研究分野（Global Health + Technology）はコンピューターサイエンスの知識や考え方のみでできることは非常に限られているため、Global Health の研究者とのネットワークを介して問題意識とアプローチに試行錯誤しながら進めていきたいと思えます。

III. PhD における悩み

二年目は今後の研究方向について真剣に考えることが多く、特に後半は「自分がやりたいこと」と「自分ができること」の間で葛藤が生じていることに気づきました。「自分がやりたいこと」は脆弱なコミュニティに医療を届けること。これは技術に限らず医療全般をより良くしたいという意味です。「自分ができること」はヘルスケアの技術面の研究すること。特に発展途上国においては技術の導入を考える以前に資源不足や貧困の削減を考慮する必要があると思ひ、「自分ができること」、つまり技術で解決できることは限られているのではないかと考えました。悩みが解決されたわけではありませんが、指導教官、友達、財団の先輩方と相談しながら徐々に自分の研究の価値とニッチの活かし方をはっきり示せるようになりました。今後もコンピューターサイエンティストとしてのポジショニングについて考えていこうと思ひます。どのような形で社会に貢献したいのかという問いに対して明確な答えと主張を述べられるようになりたいです。

IV. 最後に

博士課程 2 年目は財団の先輩方に相談に乗っていただく機会が多く、いつも貴重なアドバイスをいただけて非常に感謝しています。財団内でさまざまな魅力的なロールモデルと出会いました。今後も皆さんと交流する機会があることを楽しみにしています。